

岩生成一先生略年譜・論著目録

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

26

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

113

(発行年 / Year)

1974-03-23

岩生成一先生略年譜・論著目録

岩生成一先生 略年譜

明治三十三年六月二日 福岡県小倉市に誕生。

大正十四年三月 東京帝国大学文学部国史学科卒業。

同 年四月 東京帝国大学史料編纂官補に任ぜられ、

近世海外史料の調査・編纂を担当。

昭和三年七月

史料蒐集のため中華民国・英領香港・仏

領印度支那・シャム・英領馬來・蘭領東

印度に出張、特に近世初期の日本移民に

関する遺跡を踏査し、バタビヤ文書館所

蔵の日本関係史料を採訪す、十二月帰国。

台北帝国大学文政学部助教授に任ぜらる

昭和四年十一月

(南洋史講座担当)

台湾總督府在外研究員として蘭領東印度

・オランダ・イギリス・スペイン・ボル

トガル諸国に留学を命ぜらる。

バタビヤ文書館を再び採訪、以後蘭・英

葡・西諸国の文書館を採訪す。

帰国

昭和七年六月

昭和十一年三月

座担当)

昭和十四年八月

史料調査のため蘭領東印度に出張、バタビヤ文書館を訪れ、前二回の調査に洩れた日本関係未刊史料を調査す。十二月帰国。

昭和十六年五月

著書「南洋日本町の研究」に対し学士院賞を授与さる。

昭和二十年十一月

中華民国国立台湾大学文学部に留用さる。

昭和二十一年四月

同大学文学部教授に聘せらる。

昭和二十一年十二月

台湾より引揚げ帰国。

昭和二十二年一月

廃官につき台北帝国大学教授退職。

昭和二十三年四月

法政大学文学部兼任講師に任ぜらる。

昭和二十三年五月

日本大学兼任講師に任ぜらる。

昭和二十四年二月

文部教官に補せられ、東京大学教授に任ぜらる。文学部国史学科第三講座担当。

史料編纂所教授に併任せられ、近世海外史料の調査編纂を指導す。

東洋文庫研究員となり、近代日本史研究室を主宰す。主として和蘭語による日本・中国と諸外国との交渉史を研究しつつ、和蘭のヘーグ古文書館蔵東インド会社接受文書目録のマイクロフィルム作製とその整理など、同文庫の図書の整理、購入および研究生の指導に努む。

文学博士の学位を授与さる。(東京大学)

昭和二十六年四月

昭和二十六年十一月十日 法政大学史学会第三回公開講演会において「近世に於ける日本と南洋との関係」と題して講演。

財団法人史学会監事となる。

同年

昭和二十七年四月

東京大学大学院人文科学部国史学修士・博士課程主任教官に任ぜらる（近世史特に対外関係史を担当）

同年

昭和二十九年四月

日蘭交渉史研究会を結成し主宰す。
上智大学大学院非常勤講師に任ぜらる。
（四十七年三月に至る）

昭和二十九年六月

日本学士院の命により、万国学士院連合総会に出席のため、スイスに出張し、日本関係欧文未刊文書調査と撮影交渉のためオランダ・イギリス両国に出張す。同年九月帰国。

昭和三十年六月

日本学士院の命により、万国学士院連合総会に出席のためベルギーに出張、さらに日本関係未刊文書調査のため、オランダ、フランスに出張す。同年八月帰国。
日本ユネスコ文化活動委員会調査委員となり現在に至る。「世界人類の文化と科学の歴史」の編纂に関与す。

同年

昭和三十二年秋

ユネスコ主催の東西文化交流史国際学会の組織委員としてその運営にあたる。

昭和三十三年

同年

同年

昭和三十五年二月

日仏歴史学会会長に選任さる。
日蘭協会顧問に任ぜらる。
『朱印船貿易史の研究』が、日本歴史学協会より同年度優秀研究書として推薦を受く。

昭和三十五年八月

日仏文化交流に尽力した功勞により、フランス国政府より勲章 *Arts et Lettres* (Officier) を授与る。

同年十月

日本学士院の委嘱により日本関係未刊文書調査のため、オランダ、イギリス、スペイン、ポルトガル、フランス、スウェーデンに出張。同年十月帰国。
東方学研究連合委員会連合会議に日本側委員長として出席のため台湾に出張し、研究上の連絡および研究資料の交換の問題を討議す。

昭和三十六年三月

停年に依り東京大学教授退官。

同年四月

日本大学文理学部教授に任ぜらる。

同年同月

財団法人史学会顧問となり現在に至る。

同年七月

東方学会理事となり現在に至る。

昭和三十七年十一月

ユネスコ東アジア文化研究センター専門委員会委員長として極東諸国と西欧諸国との接触に関する歴史的研究を分担し現在に至る。

昭和三十八年四月
同年同月

法政大学文学部教授に任ぜらる。
法政大学大学院日本史学専攻主任教授
(日欧交渉史・蘭学史を講ず) 史学科主
任、法政大学史学会会長、法政蘭学研究
会会長となる。

昭和三十九年一月八日

講書始に「近世日本の海外貿易」につい
て進講す。

同年八月二十七日

羽田を発して台湾に赴き旧日本総督府関
係史料を調査(ユネスコの依頼による)

同年八月三十日

この間香港において開催された「東南ア
ジア国際歴史学会」に出席。

同年九月七日

第六十三回史学会大会において「ヨーロ
ッパ文書館におけるアジア関係文書につ
いて」と題して講演。

同年十一月七日

日本学士院第一部(人文科学)会員に
選任さる。

昭和四十三年一月

朝日文化賞を受ける。(「外国史料の導
入によって日本史研究に新分野を開いた
功績」による)

昭和四十三年四月

財団法人国際教育情報センター理事とな
り現在に至る。

昭和四十五年十一月三日

勲二等瑞宝章を叙勲さる。

昭和四十六年三月

定年により法政大学文学部教授を退職、
同大学文学部講師に任ぜらる。

昭和四十七年四月二十三日 東京において南島史学会が設立され、
会長に選任せらる。

昭和四十七年六月十日

蘭学資料研究会第十四回大会(慶応義塾
大学三田西校舎)において「幸田成友と
蘭学」と題して講演。

昭和四十七年十一月

日蘭交渉史の研究および日蘭親善の功に
より、オランダ女王からオランエ・ナッ
サウ勲章コマンドー章を授与さる。

昭和四十七年十二月十六日

蘭学資料研究会・日蘭交渉史研究会
・日本医史学会合同例会(慶応義塾大学
医学部)において「カピタンの娘、平戸
のコレネリア」と題して講演す。

昭和四十八年十一月一日

英国・オランダ両国へ出張、日・英両
国学士院間での近代日本における日英文
化交流史共同研究について協議し十二月
五日帰国。

岩生成一先生著書・論文目録

▼著書

近世日葡交通小史 葡萄牙副領事館 昭和二年七月 七四頁

慶元イギリス書翰 駿南社 昭和三年八月 五九八頁

近世初期の対外関係 岩波書店 昭和九年十月 一三二頁

南洋日本町の研究 南亜細亜文化研究所 昭和十五年四月 三六

七頁

法政史学 第二十六号

一一〇

- 日本近世海外交渉史 法政大学 昭和二十八年三月 一八六頁
 近世日本南洋発展史 日本大学 昭和二十八年七月 一三九頁
 朱印船貿易史の研究 弘文堂 昭和三十三年四月 四二六頁
 十七世紀台湾英国貿易史料 台湾銀行調査課 台北 一九五九年
 一月 二二一頁
 朱印船と日本町 至文堂 昭和三十七年十二月 二三三頁
 Early Japanese Settlers in the Philippines Foreign Affairs
 Association of Japan. 東京 一九四三年 七八頁
 Van Vliet's Historiae Verhaal in Siam. 1640. 東洋文庫
 一冊 一九五六年、一九五八年 一三三三頁、九九頁
 List of the Foreign Office Records Preserved in the Public
 Record Office in London relating to China and Japan. 東
 方学会 一九五九年 二五六頁
 Jan Joosten, The Forerunner of the Dutch-Japanese Relation.
 日蘭協会 一九五八年 二四頁
 鎖国（日本の歴史14） 中央公論社 昭和四十一年 四七四頁
 南洋日本町の研究 岩波書店 昭和四十一年五月 四一五頁
 アピラ・ヒロン日本王国記（注釈） 岩波書店 一九六五年 四
 九四頁
 リンズホーテン東方案内記（訳ならびに注釈） 岩波書店 一九
 六八年 七六四頁
 セーリス日本渡航記（校訂） 雄松堂 昭和四十五年 四二一頁
 ヴイルマン日本滞在記（校訂） 雄松堂 昭和四十五年 一〇九頁

▼論文

- 。南洋日本移民史関係論文
 バタビヤ移住日本人の活動 史学雑誌 四六の一
 洗礼簿を通じて見たるバタビヤの日本人 東方学 第一輯
 十七世紀バタビヤ移住日本人の奴隷取引 東方学論集 第一輯
 十七世紀バタビヤ移住日本人と金融業 日本学士院紀要 二の一
 モルッカ諸島移住日本人の活動 台北帝国大学文政学部史学科研
 究年報 第五輯
 媽港ゼスス会のコレジオにおける日本人 歴史地理 七一の五
 江戸時代初期トンキンにおける日本人 歴史地理 五三の六
 台湾における初期日本移民 台法月報 三六の一〇、一一、一二
 南洋における日欧関係の推移 史学会編『東西交渉史論』収載
 長崎出身のジャカルタ移住日本人 村上武左衛門の遺言状 法政
 史学第二二号（昭和四十五年三月）
 一七世紀初期バンタン移住日本人について 和田博士古稀記念東
 洋史論叢
 一七世紀におけるバタビアの日本人移住者（英文）『蘭学と日本
 文化』所載
 史伝ジャガタラお春 日蘭協会講演記録 昭和四十七年
 。近世外交史関係論文
 豊臣秀吉の台湾招諭計画 台北帝大文政学部史学科研究年報 第
 七輯
 豊臣秀吉の台湾征伐計画について 史学雑誌 三八の八
 長崎代官村山等安の台湾遠征と遣明使 台北帝大文政学部史学科

研究年報 第一輯

長崎代官村山等安とその没落 歴史地理 四七の二

一六一年暹羅国日本遣使考 史学雑誌 四四の六

有馬晴信の台湾島視察派遣 台湾総督府博物館創立三十年記念論文集

松倉重政の呂宋島遠征計画 史学雑誌 四五の九

鎖国 岩波講座日本歴史 一〇

日本呂宋交通史上に於ける一二の地名に就いて 歴史地理五の四

貿易史関係論文

泰人の対日国交貿易復活運動 東亞論叢 第四輯

近世日支貿易に関する数量的考察 史学雑誌 六二の一

江戸時代における銅銭の海外輸出について 史学雑誌 元の一

三百年前における台湾砂糖と茶の波斯輸出 南方土俗 二の二

鎖国時代における日本貿易品の販路 日本歴史 一の五

The "Country of Silver" Japan Quarterly. Vol. V, No. 1

Japanese Gold and Silver in the World History International Symposium on History of Eastern and Western Cultural Contacts. 1959

近世日本の海外貿易 歴史第二五輯

江戸時代の砂糖貿易について 日本学士院紀要 三二の一

御朱印船関係論文

異国渡海朱印状の法的効力について 社会経済史学 二二の三

御朱印船の貿易額について 史学雑誌 五九の九

朱印船貿易家の性格 社会経済史学 一七の一

朱印船の按針について 歴史地理 八三の二

朱印船の構造 歴史地理 八五の一

朱印船の絵馬について 日本歴史 二七

銀座と朱印船貿易 和田博士還暦記念東洋史論叢

海外貿易家平野藤次郎 歴史地理 四八の四

日蘭交渉の先駆者ヤン・ヨーステン 日本歴史 一一六

異国渡海御朱印状集 歴史地理 五一の六

江戸幕府の代官平野藤次郎―近世初期一貿易家の系譜― 法政大学文学部紀要 第十三号

華僑史その他関係論文

明末日本平戸僑寓支那甲必丹李且考 東洋学報 一三三の三

下港 (Bantam) の支那町について 東洋学報 三二の四

アンボイナの初期支那町について 東洋学報 三三の三・四

占城国末期の国都と貿易港について 東洋学報 三九の二

安南渡航朝鮮人趙完壁伝について 朝鮮学報 第六輯

安南国の烏蘭国水軍求援国書について 東方学報 第二十三輯

Li Tan, Chief of the Chinese Residents at Hirado, Japan in the Last Ming Dynasty. Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko. No. 17.

鄭成功の一書翰について 法政史学 第一七号

文書館並に所蔵文書解説論文

オランダ東印度会社日本貿易史料について 社会経済史学 二五の一

イギリス東印度会社の東亞貿易史料について 史学雑誌 六〇の九

バタビヤ地方文書館と所蔵日本文書 国民の歴史 二二の二

和蘭国立文書館所蔵台湾関係史料 南方土俗 二〇二

ヘーグ文書館所蔵大阪城図 歴史地理 六五の一

リチャード・コックス日記について 神田喜一郎博士書誌学論集

天理図書館所蔵出嶋蘭館文書について ビブリア 一五

平戸イギリス商館文書とその性格 法政大学文学部紀要 第九号

オランダ、イギリス両国人の初期探險航海とその研究資料（大航海時代叢書別巻に収む）一九七〇年

。日欧文化交流その他関係論文

日本文化史上のツューンベリー『ツューンベリー研究資料』に収載

C. P. Thunbergs Ställning I Japanssch Kultur historia

Svenska Linne-Sällskapetets Arskrift. Årgång. XXXVI 1953

ツューンベリー宛日本人書簡『ツューンベリー研究資料』に収載

日本最初の西洋学会員―桂川甫賢伝― 日本歴史 一三六

日欧文化交流の夜明 国際文化 四六

石橋博士所蔵世界図年代考 歴史地理 六五の六

近世商業資本の実態 日本大学文学部研究年報 第一輯

黒板先生の海外旅行（澳門市会議事堂所蔵議事録目録を含む）

古文化の保存と研究。

オランダ史料から見た江戸時代初期西洋医学の発達 日本学士院

紀要 二六の三

ツューンベリー研究資料補遺 東方学会創立二十五周年記念東方学

論集

日本における蘭医ウィルヘルム・テン・ライネについて 蘭学資料

研究会研究報告 七四

A Dutch Doctor in Old Japan 蘭学資料研究会研究報告 八七

呂宋の壺について 南方土俗 三〇二

（安岡・大森）

岩生成一先生には、史学科創立当初の昭和二十三年以来、本学に出講され、二十七年（新制）大学院設置以降は日本史学専攻課程における指導にも当られ今日に及んでいる。その間、三十八年度から八年間は、専任教授として、史学科と本会の運営を主宰し、教育の充実と学会活動の推進ならびに研究者の育成に意を注がれたが、四十八年度をもって、永年学部で講じて来られた「海外交渉史」の講義を閉じられることになった。大学院では、なお引続いて御指導賜わるのであるが、この機会に多年にわたる先生の御業績の目録と年譜を「法政史学」に掲載させていただくことのお許しを得た。

今後とも益々お元気で後進をお導き下さるよう、一同切に先生の御加餐をお祈りしてやまない。

なお、資料を提供して下さいった日本学士院庄司三男氏に厚く謝意を表する。（昭和四十九年三月） 法政大学史学会

岩生成一監修『京都御役所向大概覚書』の刊行について

四十六年三月末で岩生先生がご退職になることをお聞きして、記念論文集など、いろいろな企てがよりより立てられた。しかし先生のご意志で実現をみそうにない。それで、早くから進められ

ている「和蘭風説書」史料集や、「伝記索引」の公刊がそれに代わる意味をもつことになった。ということで、わたしどもも驥尾に付して、数年来、岩生先生が演習に使用されたこの史料の活性化を企てることにした。さいわい、先生のご同意を得て、親しく大阪清文堂との折衝もしていただいた。

「京都御役所向大概覧書」は、記事内容から推して享保三年の成立にかかる。京都奉行所が関係先から書き出させた膨大な資料を集録、整理したもの。その内容は、地域的には京都だけでなく、畿内五カ国に近江・丹波・播磨を含めて八カ国におよび、禁中・公家・幕府・寺社・都市ならびに地方支配を中心に、政治・経済・社会・文化の諸領域にかんする百科全書的史料群である。

このたびの刊行にあたっては、国会図書館本を中心に東大史料編纂所本との綿密な校合を行ない、詳細な人名、事項索引を付して、利用の便をはかった。

昭和四十七年大学院修士課程修了の全員、すなわち渡辺、仙石、長尾、新城、村岡、岡田の六人がそれぞれ専門領域を異にしなから、それを生かしつつ協力して、原稿化、校合、校正、索引作成にあたった約二年の共同作業は、忘れがたい貴重な経験である。

いま、ここに上下二巻約一〇〇〇ページの史料集を公刊できるに至ったのは、ひとえに岩生先生のあたたかいご指導と諸先輩のはげまし、ならびに発行書肆清文堂の寛大なご理解によるものと、心から謝意を表する次第である。なお、微力なわたしどもの仕事について、今後ともご叱正、ご示教を先輩、同学の方がたから細大となく賜わりたくお願い申し上げます。

(長尾)

会 員 編 著 抄 (続)

- | | | |
|------|--------------------|--------|
| 中村 越 | 新説明治陸軍史 | 梓 書 房 |
| 村上 直 | 江戸幕府の代官 | 新人物往来社 |
| 〃 | *竹垣・岸本代官民政資料 | 近藤出版社 |
| 〃 | *甲斐近世史の研究 上・下 (共編) | 雄山閣出版 |
| 村井富雄 | *古墳 (日本の美術57) | 至 文 堂 |

法政史学 第二十五号 要目

- | | |
|----------------------------|-------|
| 江戸幕府直轄領の地域的分布について | 村上 直 |
| 『曆象新書』および志筑忠雄の研究史 (三) | 大森 実 |
| 「福沢屋論吉」の生成過程について | 長尾 政憲 |
| 日本通交初期における渤海の情勢について | 石井 正敏 |
| 平 宗 盛 抄 | 石塚 栄 |
| 「自由」の語義の変遷にみる思想的意義 | 村岡美恵子 |
| 近世後期旗本家政改革と御勝手向賄名主役の任用をめぐる | 仙石 鶴義 |
| 享保期における新田開発 | 上田加代子 |
| 歌舞伎創造の一考察 | 田中 玲子 |